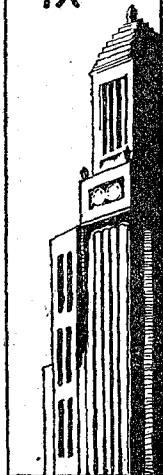


路政春秋



注 意

本欄は讀者諸氏の利用に提供す、治安と風俗とを害し又は人身攻撃に渡らざる限奇想天外的の寄稿を望む、一文は四百字位にて取扱は編輯子に一任、原稿は道路の改良編輯部宛のこと。

道路の築造も 斯うなれば

獨逸國ナチス道路は世界的に有名なものであるが軍事用のみでなく常時産業道路として利用し一旦緩急あれば飛行場にも利用し得るとかや最近獨逸を視察せられた三宅驥一博士の歸朝談中ドイツの土木事業で何人の目にも立つのは國內を縦横に貫く立派な自動車道路である。幅二十四メートルで真ん中に四、五メートルの芝生があつて道路は左右二線に分れてゐる。完全に舗装された極めて平坦なる道路で塵一つないといつてよいほどに掃除されてゐる。交通は自動車のみに限られ絶対に横断を禁じてゐる。

る。それで交叉する道路は地下式か高架式に橋を用ひてクロスしてゐる。自動車の速力一時間百二十キロぐらゐまで出すことが出来る。われ〜の乗つた自動車も平均八、九十キロのスピードを出し時に百キロを超えた事もあつた。

この道路は世界に優れたる交通機關として産業上にも大なる貢獻をしてゐるが、またドイツが近年力を入れてゐる觀光事業の上にも大きな役目をなしてゐる。そして一

朝事ある時は重要な國防上の役目をするもので、飛行機の發着場として立派に用ひられるのである。そのためかこの道路には並木が植ゑてない。この道路は一ヶ年に一事であるが如く傳へらる、官吏といへば何千キロを建設することになつてをり既に三

吏道もまた人の道

頃日議會人に依つて官吏の身分保障令が廢止せられなければ官僚界の刷新は不可能であるが如く傳へらる、官吏といへば何か特殊的なものもあるかの如く解せられ

て居るが官吏も國民であり、其の與へられたる職分に努力邁進すべきもので吏道も決して一般社會外に在るものでなく矢張り人の道である、だが官吏たるものは百も反省し千も自肅し萬も自戒せねばならぬ、東朝紙上の一寄書を刮目して讀むべきか曰く。

◇吏道刷新は、積極的には、官吏が天皇中心の吾が國體觀に立脚して、自分は天皇の官吏であるといふことを自覺し、これを行ふことである。

◇官吏は決して政權に屈服したり、財閥に阿諛したりしてはならぬ。常に毅然として、天皇の官吏たる御奉公に全身全靈を捧げるべきである。それには官吏養成及び任用の上に國體明徴の施設を徹底せしめねばならぬ。

◇吏道刷新は、消極的には、官吏が身を持すること謙虛にして、先づボーナス廢止、出稼ぎ廢止等を斷行することである。ボーナスは資本主義生産の利潤あるところに可

能なもので、官廳の消費に利潤のあるはずがない。商工省官吏のボーナスが羨ましがられてゐるなどは、言語道斷といふべきである。と官吏諸君以て奈何とする。

國運發展の道 の一場面か

少年拓殖義勇軍の世話役大陸の母や大陸の花嫁など女性の新大陸進出が注目されてゐる時、代議士松岡俊三氏二女貞子嬢は一昨年來單身鮮滿國境の山間部落に入り、半島の人々とともに植林事業に從事、去る一月半島の青年を連れて内地視察のため上京中だつたが、近く再び山生活の準備を整へて歸郷することとなり「大陸と女性」の好話題を投げてゐる。行けば青年女性に獎むる満支の大陸發展。

労働者慰安も 國策の一途

三宅博士の獨逸視察談の一節に次の如き

一駒がある、ドイツで見た澤山の社會施設の内で特に他國に例のないものとして心を惹いたものは労働者の慰安のために出来た遊覽船である。これは一萬トン乃至二萬トンくらいの汽船で目下六隻くらいあるわれらがハングル港を見學した際、この種の巨船が今まで建造中の足場つたひに案内されて内部を視察したが、船内は外國航海の客船に比すべき設備で、客室は全部等級なし。社交室、娛樂室なども完備して實に立派なものであつた。

この種の船は労働者たちを載せて、北海から大西洋、地中海を遊覽し途中の島や港に上陸して見物させるのである。われくの歐洲から歸りの船がイタリーのナポリに寄港したら、この種の遊覽船が樂しきうなドイツの男女労働者を滿載して二隻も岸壁に着いてゐるのも見た。新興獨逸の英傑、無血總統としての國策の一途かと思はる。

あるかなきか

の珍聞奇譚

(24)

○殉教史を彩る遺蹟 福岡縣三井郡山川

村宇神代安國寺裏の竹藪から發見された薬師如來の石像を調べたところキリスト教徒

たる同村青木某が佛教に歸依した眞似をなしある。薬師如來にせたマリヤの像をつくり禮拜した事實を物語るものと判明した。マリヤの像は頭巾や衣服の襞などで巧みに如來像に仕立てあり迫害されたキリスト教徒の根強い信仰を物語り日本キリスト教史に貴重なる研究材料になるものとみられてゐる。

○新國寶滑石經筒 福岡市船町許斐儀一郎氏所有の滑石經筒は去る明治四十年早良郡隈田村西浦山天福寺跡から掘り出されたもので筒の高さ一尺八分、口徑七寸八分、蓋直徑一尺、厚さ一寸三分の大いさである。筒に彫られた供養文に依ると今を去る八百年前發掘された青銅製、陶器製、のものと

異り滑石製は極珍らしく特にこの經筒は殆んど完全な原形を備へ技術的に見てもすわりが良く學界でも貴重な参考資料と云はれてゐる。

四代目宗七の能面

博多人形の先祖としてその黄金時代を作つた四代目宗七の作品はほとんど散逸してしまひ、福岡市には見當らなかつたところ二十三日市役所の永島市史編纂主任のもとへ持參された鬼の能面が正真正銘の四代宗七賢茂の作と分つた。

所有者は同市中對馬小路活花師匠東泉流家元石田利久齋氏で、數年前他から手に入れたもので長さ七寸ぐらゐ、朱面の立派なものである、右の品とともに高さ一尺一寸の虎を持參、鑑定を乞うたが、これは三代宗七の弟武平の作であり、形は悪いが手法のたしかなところはさす宗七焼の特色を發揮して雅味横溢。

巴 藤 句 屑

憂きわれもうつる心の日永かな
裏離れの鈴にあけくれ日の永き

釣り場探して魚籠空しきに暮遲し
照りながら降りながら島の暮遅し

炊煙の軒端にうすれ飛ぶ燕
去年の巣を慕はしげなるつばくらめ

晴れながら日脚うすれつづばくらめ

去りし友の句振り懐ふ窓の遅日かな
傷兵は僧でありけり彼岸寺
歡樂の灯に人漂ふや春の風
遊覽の船窓かすむつばめかな
後ろ向けば男なりけり臘月